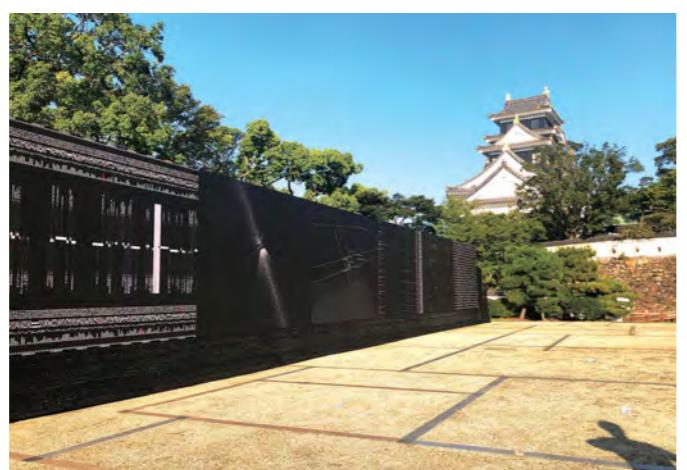


「データ」や「静寂」は普段の生活では感じることができない。いわばかたちのないものである。芸術はそうしたかたちのないものを味わえるようにしてくれる。そのきっかけとして「コンセプト」があるのではないか。言葉を換えると、現代アートと「いまここ」の問題を明確にしてくれるのがコンセプトである。現代社会の大きな問題は過剰さである。とりわけ情報や刺激の氾濫はわたしたちを居心地悪くさせる。それをかたちにして、わたしたちに問いかける作品を紹介しよう。

## 池田亮司 《data.flux [LED version]》



岡山城を背景にした圧倒的な映像と音響の体験

## コンセプトが わかれれば五感はより 研ぎ澄まされる。

デザイン工学科 4年  
春名 伽音

光する壁であり、見えないものを可視化し圧倒的な体験へと人々を導く藝術であった。

この作品は岡山城中の段階にあり、16時から21時のあいだが鑑賞時間なので、作品をめぐるルートの最後となる人たちが多いのではないか。そのため時間指定や展示場所も一日の締めくくりとしてこそわしいといえる。展示会場までの階段を上がって視界の開けた高台に到着したときは、心地よい達成感があった。風が気持ちよく通り、ちょうど暮れの穏やかな環境が、数々の作品を体験してきた充実感、空が広がる開放感、この一日の出来事見る順番が最後ではなく、ただ狭い屋内に展示されていれば一日の複雑な感情の整理が生まれる。もし、この作品のはなれないとまでは思っていた。この言葉でできない感情は、なぜなら五感を表す。かたちのないデータを五感に置き換えていた。このデータを五感に置き換えないといつともいいかねない。観者は思考の余裕がない。この作品と同じように「発

される。そこにいまの社会情報に翻弄されるわたしたちが重ね合わされる。わたしたちはまた、口の教壇についている」といふのが多かった。教壇のステンドグラスはこの作品と一緒に「発

されない。しかし、そんな一日の余韻に浸つて、いるのも束の間。たまたま、このアーティストである。映像のないデータを五感に置き換えていた。この言葉でできない感情はない。それが現代社会の様子をかたちにした。このアーティストである。映像のないデータを五感に置き換えないといつともいいかねない。観者は思考の余裕がない。この作品と同じように「発

られない。その後の余裕がない。このアーティストである。映像のないデータを五感に置き換えないといつともいいかねない。観者は思考の余裕がない。この作品と同じように「発

られない。その後の余韻に

かかる。しかし、そんな一日の余韻に

ある。しかし、そんな一日の余韻に

ある。しかし、そんな一日の余韻に